

<b>Title</b>	巻頭言 哲学と文献学の間：人文学の意味
<b>Author(s)</b>	清水, 正之
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 3-8
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5299">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5299</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 巻頭言 哲学と文献学の間——人文学の意味

聖学院大学副学長 清水正之

今夏、安酸敏眞氏（現北海学園大学）によるアウグスト・ベーク（August Boeckh, 1785-1867）の著書 *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, 1866 の翻訳『解釈と批判』（原題『文献学的諸学問のエンツィクロペディーと方法論』、なお第二主要部は訳出されていない）を読み、日本デイルタイ協会から求められていた短い書評を仕上げた。

原著は、ドイツ文献学ないし解釈学に関心をもつ者には周知の本であるが、一般には、哲学・倫理学の研究者でも、よく読まれていた著作とはいえない。私は、倫理学・日本倫理思想史を専攻するものであるが、近代の日本思想史研究の確立に方法論的に寄与した著作として、拙い理解ながら、大学の頃から関心を持ち、ふれてきた。ベークの文献学は、和辻哲郎等の思想史研究に影響を与えたデイルタイの解釈学の成立にも深く関わり、人間と世界の「歴史性」の洞察の深化に道を開くという、哲学的的位置にある。

原著は、形式的にも内容的にも、決して分かりやすいものではない。文献学的営為が普遍的にぶつかる校訂、古文書の扱い、異文など、文献学の素材の具体的な事柄にも周到にふれているが、それ以

上に、哲学的な方法論化と概念化をなによりめざしたものだからである。ギリシャ語・ラテン語原典や古典語への知識と言及、古代から近代の哲学史、ドイツのみならず英仏蘭の文献学への歴史的俯瞰的な知識に及ぶものでもある。安酸氏の翻訳は、本文の読みやすい日本語化をはたされ、周到な訳注をくわえ、原注を補充し、また周到な事項索引、人名索引を付したもので、労作といえよう。

こうして待望された翻訳にふれて、あらためて印象深かったことは、この原著自体が、近い後進研究者による文献学的営為によって成り立った著作だということである。ベークの二六年間に及ぶ文献学の講義に関わる自筆ノート、ノート欄外注、メモ、受講者の講義ノートなどから復元構成されたものである。ちなみにベークは、翻訳、注釈、そして書評もまた文献学の「解釈と批判」の重要な要素にいられている。

文献学とは、ベークもいうように、普遍的ないし一般的な用語である。したがって、単に文献学というときには、ヨーロッパに限らず中国にも、あるいは日本にもあり得ることとなる。ドイツ文献学といわれるのは、ベークの場合をとるなら、ギリシャ・ローマに関する分厚い古典研究のドイツでの歴史を背景にし、その批判的蓄積の上に学問的営為を行っていると、ギリシャ・ローマの古代と近代は全くの地続きであるとの認識の上に立つて、その歴史を「理念と普遍的なものへと向けられた、ドイツの包括的精神」(五九頁)の現れとみなしていることなどによる。

今回、翻訳を読了し、あらためて感じたことは多い。きわめて方法的で、形式・内容ともに厳格な著作ということで、古典語についても拙いままこの原著に向かってきた自分であつたが、いわば読み手として身を固く緊張して対してきたのである。しかし、この翻訳にふれ緊張をすこしゆるめれば、たとえばベークが、「語り die Rede」を文字資料とともに重視していたことが分かったことが、

そのひとつである。正確に言えば、文字資料にもその背後に「語り」が存在するということへの注意の喚起といえようか。ベークの講義もまたそうした「語り」に満ちたものであったようである。その語り口は、先行するあるいは同時代の、ドイツ及び英仏蘭の文献学者への遠慮のない批判であり、古典から近代までの哲学への熱い関心であり、そして文献学の後進たちへの教育的配慮、教養教育における文献学的重要性等にわたり、多様に展開されている。若者が「学校で文献学的に陶冶されるべき理由」を「精神一般は言語によつて訓練される」が、「言語」においては「自由」が優勢であり「若者は自由な学問のおよび詩的・芸術的發展へと導かれる」（三六八頁）など、「自由な」学芸としての文献学にベークが何を託そうとしたか分かる。

本書は、「解釈学的循環」の概念が初出（一五五頁）することなど、解釈学の歴史、解釈学と哲学の関係、デイルタイとの連関にも関わる論点が提示される、哲学史的に重要な著作である。安酸氏の指摘の通り、ベークの文献学は「言語モデルから歴史的モデルへの転換を意味し、人間と世界の歴史性に対する深い洞察に根ざしている」と位置づけられる。ベークのこの書で提示したよく知られた定義が、「文献学の本来的課題は、人間精神によつて生み出されたもの、すなわち、認識されたものを、認識すること」（一六頁）である。哲学が認識であるなら、文献学は再認識であるということになる。

ベークによれば、哲学と文献学は、お互いが必要とする。哲学と文献学との一致点は、いたるところに見出されるが、とりわけ歴史の哲学と哲学の歴史は、次のように評価されるべきである。すなわち、「歴史の哲学」「歴史哲学」は文献学に最も類縁的である哲学的な学問であり、そして文献学はその最高の見地においてみずから自身をこのなかへ解消する」。これに対して、哲学の歴史「哲学史」は文献学的な学問であり、哲学は次のような仕方での学問のなかへと移行する。すなわち、「哲学

は歴史的に辿ってきたおのが行程を突き抜けて、文献学的な道の上でのみ可能なものを、最大の普遍性において最高度にアプリアリに構成することまで進むことによつてである」(二七―二八頁)と。

あらゆる「爾余の諸科学」(人文諸科学)は「この意味で哲学と文献学に根ざして」(二八頁)おり、諸科学は「歴史にその対象を有している」ことにおいて文献学的であり、文献学なしには存在しない。文献学は「認識全体の再構成」を意味するのである。そして「認識についての認識」こそ「理解」だいう。さらに先にふれたように「学問にとつて的方法的予備教育」(五〇頁)たる文献学、なかでも、ドイツの文献学の歴史は繰り返すなら「理念と普遍的なものへと向けられた、ドイツの包括的精神」をあらわしているとベークはいう。

ベークをあらためて読み考えたことは他にもある。一つはその古代観である。それは古代共和制は「真の政治的自由とそれへの真性の原理を教示」(四四頁)するという古代観であり、公共生活があつてこそその個人生活であるとする、その個と共同体のとらえ方である。二つ目には、ドイツの近代聖書解釈学の歴史に対して、比較的冷めた目を向けていることである。文献学に信仰的熱狂が介入することへの警戒感を示している。二つのことは関連していることだとおもうが、キリスト教を、教会内の活動にとどめず教会外の活動のなかにその意味を見出そうとした、いわゆるドイツの「文化プロテストアンティズム」との流れからみるとベークは異質な感じがするといえる。

私が、この原著を知りそれなりにふれたのも、明治期の日本思想史研究の成立にあたつて、ドイツ文献学、とりわけベークの文献学の摂取をもつて、方法的に確立しようとした流れがあつたからである。ベークの摂取は、さらにデイルタイの解釈学の摂取へとつづいた。

最初にベーク（ベック）にふれたのは、近代国文学の基礎を開いた芳賀矢一であった。芳賀は、哲学史・思想史をめざしたわけではないが、「国語・国文を基礎として日本国民の性質を研究する」（渡独前の『国学史概要』）という意図をもっていた。彼は国文学を西洋の文学研究に照らして「科学的」たらしめようと考えていた。渡独前から関心を寄せていたベークの文献学、ドイツ文献学の諸潮流、歴史学派の精神科学、精神史の概念を学んで帰国する。帰国後、多くのベークはじめドイツ文献学に言及した文章を残している。芳賀によれば、国文学は多くの欠点をもつが、十分ドイツ文献学に擬せられるものである。彼は、ベークの「認識されたものの認識」という概念に導かれて、国文学研究を、文献学としての国文学を彫琢することで、近代学問たらしめようとしたのであった。

日本思想史研究という領域の確立に寄与した村岡典嗣は、国文学をドイツ文献学に擬すという観点や、またベークの文献学への関心は芳賀矢一によって喚起されたものだといっている。彼は、日本思想史研究に専念するまえには、波多野精一のもとで宗教哲学研究に従事していた。また横浜のドイツ神学校在籍中は、新カント派、ドイツ自由神学の最新の潮流を学んでいたようである。

哲学と思想史との関係は隘路にみちている。あるいは体系的哲学的研究と歴史的研究の関係のむずかしさともいえる。昭和一四年の文章で、村岡はこういう。

近時往々にして、欧州的学問のに範疇より独立しての日本学提唱の声を聴く。その志や壮なりといえども、その前提として、その為には、欧州が創造したというべき認識論に対して、全く新たなるしかも普遍的価値を有する別種の認識論が樹立されて、一般的に承認されねばならぬことを、吾人は決してわすれてはならぬ。かくの如き哲学の根本的革

新は、或は我國の哲學者に課せられた、將來の大いなる任務であろう。しかしながら国学の学的完成は、實際的にそれとは別に為さるべく、また為されねばならぬ。若夫<sup>もしそ</sup>れのために、折角に明治以來遂げ來つた国学の、種々の方面に於ける近代學問的發達の途を、阻止するおそれあらしめるが如きは、我國の學問、また文化の為に、遺憾とすべきである。

（『国学の学的性格』昭和一四年、『増訂 日本思想史研究』（岩波書店、一九七五）一一三頁、新かな漢字に変更）。

国学は多くの欠陥をもっている。また芳賀や村岡、あるいは和辻らのベーク、ディルタイの文献学的解釈学的思想史像への批判があることは十分承知している。しかし同時に、こうした思想史像をまづはいったん手にしたことは、人文科学にとって、「僥倖」であつたと私は見ている。ともかくも批判するに値する、思想史的自己像を近代日本は一旦作つた、といえるからである。村岡に典型的にうかがえる体系性と歴史的考察との隘路は、今もなお問題であろう。同時に村岡の、隘路の鋭い自覚（哲学よりはまず文献学的歴史的研究所の確立を……）は、ベークを学んだことで一層極まつたのではないか、そしてそのこととキリスト教に接したこととは、何ごとかの連関があるのではないか、とベークの訳書を手にしたことをきっかけに、あらためて考えてみたいこととなつた。